無憂樹

※題字は前住職・教修の筆

発行
浄土真宗　本願寺派（お西）
圓融山　信行寺
〒662-0921　西宮市用海町１－22
TEL　０７９８－２２－２２８２

写真：菩提樹（ボダイジュ）

仏教の発祥の地、ブッダガヤに生えている。今からおよそ 2500 年前、お釈迦様はこの樹の下で悟りを開かれたと伝わる。大きく枝を広げるその姿は、まるで仏教の広がりを表すようにもみえる。

お寺の掲示板

この世は縁次第でたちまちに移り変わる世界であって、すべては空しく偽りで、真実といえるものは何ひとつない。その中にあって、ただ仏さまの教えだけが真実の拠り所となるのです。（親鸞聖人）

コロナ禍での対応

当山ではコロナ禍において検温・マスク着用の上、月忌参り・年忌法要・お葬儀等をお勤めしています。年忌法要など、ご自宅にご親戚が集まって「密」になりそうな場合は、信行寺の本堂をお使いください。本堂にはスペースがありますので「密」になりにくく、参詣者の間隔も十分あけることができます。

また、近年のお葬儀はご家族等のごく限られた参列者でおこなう「家族葬」が主流となってきています。今後は新型コロナウイルスの影響によって、その傾向がますます高まることが予想されます。お通夜・お葬儀といった大切なお方とのお別れにつきましても、信行寺を会場として使っていただくことが可能です。お寺は御門徒の皆さまの「共有施設」ですので、ご遠慮なくご相談ください。

老院、卒寿（九十歳）を迎える

二月に老院が満九十歳を迎えさせていただきました。コロナ禍でなかなか外出することはかないませんが、お陰さまで前坊守とそろって元気に過ごしております。また皆様とお目にかかれる日を楽しみにしています。

山門の看板

山門の看板を新しくしました。
揮毫は書家の内村泉陽師によるものです。

旧看板

新看板

法要の様子

コロナウイルスの感染拡大防止のため、昨年五月の宗祖降誕会と秋季彼岸会は無参詣で勤めさせていただきました。法要の様子を「Ｙｏｕ Ｔｕｂｅ」で生配信し、多くの方々がご覧下さったようです。秋季彼岸会の読経と法話の様子は、左記の「ＱＲコード」からご覧いただけます。

秋季彼岸会　講師は龍谷大学准教授の井上見淳師

住職の挨拶（生配信の様子）

浄土真宗の教え

悪人正機
―阿弥陀さまのお慈悲のこころ―

一、「悪人」の意味

浄土真宗の教えの大きな特徴の一つに、「悪人正機」があります。「悪人こそが阿弥陀如来の救いの本当のめあてである」という意味です。この悪人正機、特に「悪人」の意味が、しばしば誤解されています。私たちが「悪人」と聞いて思い浮かべるのは大抵、犯罪者などの社会の善悪を基準にした悪人でしょう。そして私たちは、そういう悪人は罰せられてしかるべきだと考えます。その延長で悪人正機を考えると、悪人が罰せられるどころか救われるというのは理不尽ではないのか、といった疑問が出てくるわけです。しかし、悪人正機の「悪人」は、社会の善悪を基準にしているのではなく、仏教の善悪を基準にしているのです。仏教の善悪を基準にすれば、自己中心的にしか物事を見ることができず、貪りや怒りのこころを抱いて悟りに向かうどころか、自らで迷いを深めていくようなものが悪人とされます。

二、悪人とはだれか

私たちは日々、こころに様々な思いを抱えていきています。こころの中にはとても口に出せないようなおそろしく自己中心的な考えが渦巻いています。社会の善悪を基準にすれば、それが理由で犯罪者になるわけではありません。しかし仏教の善悪を基準にすれば、生きるために多くのいのちを頂戴し、自己中心的な煩悩に支配されて迷いの中にあり続ける私は、まさに悪人であったと知らされます。悪人正機の「悪人」とは、どこかの犯罪者といった他人事ではなく、この私自身のことなのです。

三、平等の慈悲

そのような悪人の私を、阿弥陀さまは救いの本当のめあてとされているというのが、悪人正機の正しい意味です。これについて『大般涅槃経』というお経の中に、「七子のたとえ」という例え話が説かれています。

七人の子をもつ親がいます。親の愛情はどの子にも平等です。しかし、七人の子のうち一人が病気になったならば、親の愛情は病気の子にひときわ注がれることになります。決してえこひいきではありません。七人みな平等だからこそ、病気の子をそのままにはし

ておけないのです。

同じように、阿弥陀さまもまた、全ての生きとし生けるものを救いたいと、平等に慈悲のこころを向けてくださっています。だからこそ、この慈悲のこころは全ての生きとし生けるものの中でも、いま現に煩悩という重い病気によって苦悩する私（悪人）にこそ、ひときわ注がれているのです。

四、悪い方がいい？

「悪人こそが救いのめあて」と聞くと、じゃあ悪いことをしてもいいのか、むしろ悪いことをした方がいいんだな、と開き直る人がいます。それは前の例え話で言えば、病気になると親が優しくしてくれるから病気になる方がいいというのと同じで、誤った受け止め方です。親の愛情を知らされたならば、子どもは少しでも親に心配かけさせないようにしようとするのではないでしょうか。親がどれだけ病気の苦しみを心配しているのか、阿弥陀さまがどれだけ煩悩の苦しみを心配してくださっているのかを知らされたならば、病気の方がいい、悪人の方がいいなどと開き直って、悪いことをすすんで出来るはずがありません。

いま現に私が煩悩に満ちた悪人として生きているということに気づかせ、同時にそのまま救いとってくださるのが私の念仏となってこぼれている阿弥陀さまの「南無（まかせよ）阿弥陀仏（われに）」という喚び声です。そしてそのこころをあらわすのが、「悪人正機」という言葉なのです。

法話

信行寺住職　四夷法顕

本願力にあひぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みちみちて
煩悩の濁水へだてなし

（親鸞聖人『高僧和讃』）

（阿弥陀仏の本願のはたらきにお遇いすれば、空しいときを過ごしてしまうということは決してなく、宝の海のような功徳が身に満ちて、濁った水のような煩悩も救いの妨げになることはない。）

元号が平成から令和に変わり、はや三年目を迎えています。明治時代以降は一世一元となっていますが、それまでは大災害、飢饉や疫病等があると頻繁に元号が変わっていたようです。親鸞聖人が九十年のご生涯で経た元号の数はじつに三十六、平均すれば約二年半に一度改元していたことになり、聖人を取り巻く環境がいかに厳しいものであったかが窺えます。その上、ご自身のご生涯においても幼少時代における父母との別れ、比叡山時代のご苦労、念仏弾圧、ご長男善鸞さまの義絶など、聖人の九十年間は決して順風満帆なものではなかったように思えます。しかし聖人は「困難ばかりで大変な人生だった」とは振り返っておられません。むしろ「本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき」と、阿弥陀さまの願いに出遇わせていただき、尊い人生であったと仰っています。

思い通りにならない人生ではありますが「生まれてきてよかった」と、私の「いのちの意味」がたった一つの言葉によって与えられていく、その言葉こそ「南無阿弥陀仏」であると親鸞聖人は教えてくださいました。

かつてある先生から、「人は事実ではなく意味で生きている」というお話を聞かせていただいたことがあります。考えてみれば、人は人生に起こる様々な出来事に対して何らかの意味を見出して生きています。大きな困難が立ちはだかった時、私たちはそこに意味を見出し、乗り越えていこうとします。逆に目の前の問題に対して何の意味も見出せない時、それは自分にとって大変つらいことです。老・病・死も同様に、思い通りにならない現実がつらいこともちろんあるでしょうが、実はそこに意味を見出すことができないことがつらいのではないでしょうか。

老いること、病むこと、死ぬこと、誰も避けることのできない事実と向き合う中で、それらに意味あらしめていくのが仏さまの教えなのでありましょう。人は誰ひとりとして、自分の意思でこの世に生まれてきてはいません。気づいたら生まれ、年を重ね、そして命終えていかねばならないのです。なぜ生まれ、なぜ生きて、死んだらどうなるのか、これらの問いに明確な答えを与えてくれる人はいません。そのため、人は自分で生きる意味を見つけていきます。仕事、趣味、家族・・・色々ありますが、例えば私であれば現在二歳になる娘の存在が大きいと思います。しかし、子供も成長すれば親の手から離れていきますし、子供が親より長生きする保証などどこにもありません。仕事に生きる意味を求める人であっても、いつかは仕事ができなくなる日がやってきます。人は何も持たずに生まれ、人生の過程で様々な生きる意味を見つけていきますが、それらは少しずつ手放していかなければなりません。そして最後は生まれてきた時と全く同じ状態で、何も持たずに命を終えていくのです。その私の有り様をお釈迦さまは『仏説無量寿経』に、

人、世間愛欲のなかにありて、独り生れ独り死し、独り去り独り来る。行に当りて苦楽の地に至り趣く。身みずからこれを当くるに、代るものあることなし。

と説かれました。独り生まれて、独り死んでいかなければならない私のいのち、たとえどんなに親しい友人でも、家族であったとしても誰も代わってはくれません。それはまるで、誰もいない荒野をただ独り歩んでいるようなものです。しかし、その私に聞こえてくるたった一つの言葉がありました。

〝南無阿弥陀仏〟

「お願いだからお念仏を称えてこの人生を歩んでほしい、そして命の縁が尽きたならばあなたを必ずお浄土へと生まれさせましょう」という阿弥陀さまの願いが、この私を包み込んでくださっています。私はただ生まれて、ただ死んでいく人生ではなかった。阿弥陀さまの大きな願いに生かされ、お浄土へ生まれて仏のさとりをひらかせていただくいのちであったと、さわりなき救いを告げてくださる「南無阿弥陀仏」に、生と死をつらぬく「いのちの意味」を賜っていくのです。

合掌

令和三年度　年忌表

◇過去帳をご確認の上、ご希望の日時はお早めにご相談ください。

一　周忌…　令和　二年　　往生

三　回忌…　令和　元年　　往生

七　回忌…　平成　二十七年　　往生

十三回忌…　平成　二十一年　　往生

十七回忌…　平成　十七年　　往生

（二十三回忌）…　平成　十一年　　往生

二十五回忌…　平成　九年　　往生

（二十七回忌）…　平成　七年　　往生

三十三回忌…　平成　元年　　往生

五十回忌…　昭和四十七年　　往生

百　回忌…　大正　十一年　　往生

ご家庭で回覧し、とじて保存くだされば幸いです。